第 17 回日本在宅医学会大会　シンポジウム　概要

<table>
<tr><td>開催日</td><td>2015 年 4 月 25 日(土)</td><td>時間</td><td>17：00～19：00</td><td>収容人数</td><td>500 名</td></tr>
<tr><td>タイトル</td><td colspan="5">シンポジウム「在宅死の現状：死亡場所「自宅」の実態：孤独死が 1/3 の衝撃　私達は何が出来るのか」</td></tr>
<tr><td>テーマ</td><td colspan="5">在宅死の死亡率は徐々に上昇しつつある。しかし、同時に高齢者の異状死、孤独死なども増加しつつあり、東京都区部のデータから推測する限り、看取りとほぼ同数の孤独死が発生していることになる。今回は、医療統計の中での死亡場所が自宅、となっている死についての実情を多方面から検討し、在宅医療者が社会に対して何が出来るのかを考えていきたい。</td></tr>
<tr><td>概要</td><td colspan="5">日本の在宅死は増加傾向にあり、私達医療者の努力や市民の意識変化により、ようやく在宅で最期を迎えようというかたが増えてきたと考えがちである。しかし、東京都監察医務院のデータによれば、東京都区部では在宅死のうち、約 2/3 が異状死であり、そのうち半数が孤独死であるという。つまり、看取りを推進しているのだが、東京都のデータを見る限り、私達が看取っているのはそのうち約 1/3 に過ぎないということになる。
今回のシンポジウムでは、死亡統計上の死亡場所が「自宅」と書かれている死の実相について明らかにするとともに、都市部では在宅死の 1/3 を占めていると予想される孤独死についての実態を明らかにし、看取り以外の死についても、私達、在宅医がどのようなアプローチや対策を取りうるのかを共に考えてみたい。
東京都監察医務院がもつ日本で唯一の自宅での異状死についての精度の高いデータについて東京都監察医務院　院長の福永先生に現状についてのお話をお聞きし、現在の東京都の実情と孤独死した人たちの状況や実態について理解を深めたい。その後、各地から現状の調査報告として、横浜市で行った調査について増崎孝弘さんより、岸和田市（大阪地区）での現状について出水明さんより、東京都郊外、の都市部での状況について荘司輝昭さんより、それぞれご報告いただく。さらに、孤独死の減少をどのように食い止めればいいのか、どう考えれば良いのかを示唆する報告を２題お願いした。一つは、横須賀市での取り組みによって看取りが増加し孤独死が減少した可能性についてで、地域の自治体との協働した取り組みを湘南国際村クリニックの大友宣さんよりご報告いただく。さらに孤独死に至る可能性がある事例群の実情として、横浜市の横浜中央病院救急での孤立死一歩手前であったと推測される救急搬送事例について横浜中央病院ソーシャルワーカーの佐野晴美さんよりご報告いただく。
その上で、学識経験者として帝京大学の岸恵美子さんから都内での孤独死と高齢者のセルフネグレクトとの関係について私たちに示唆を与えていただこうと思う。
そういった孤立死の実情や取り組み、セルフネグレクトとの関係などを踏まえた上で、私達がこの問題に対して何らかの取り組みが出来るのだろうかという議論を会場の皆さんと深められたらと考えている。</td></tr>
<tr><td rowspan="5">企画者情報</td><td>ふりがな</td><td rowspan="2">姓</td><td>おのざわ</td><td rowspan="2">名</td><td>しげる</td></tr>
<tr><td>氏名</td><td>小野沢</td><td>滋</td></tr>
<tr><td>所属施設</td><td colspan="4">北里大学病院</td></tr>
<tr><td>部門</td><td colspan="4">トータルサポートセンター</td></tr>
<tr><td>役職</td><td colspan="4">センター長</td></tr>
<tr><td>ご略歴</td><td colspan="5">平成 2 年　東京慈恵会医科大学卒業
平成 2 年　医療法人鉄蕉会　亀田総合病院初期研修医
平成 11 年　同院　地域医療支援部、在宅医療部　部長
平成 24 年　北里大学病院　患者支援センター部副部長
平成 25 年　北里大学病院　トータルサポートセンター　センター長</td></tr>
</table>